
ぬらりひょんの友～百鬼夜行と氷の羽～

az43

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの友ゝ百鬼夜行と氷の羽ゝ

【Nコード】

N9579V

【作者名】

az43

【あらすじ】

氷を操る妖怪、“氷羽”。ある日道端で、百鬼夜行創設前のぬらりひよんと出会う。そして彼の一番最初の部下となり、共に百鬼夜行を作ろうと決意する。

第一幕　ぬらりひょん、拾いました（前書き）

はじめまして。

初投稿の小説です。

まだまだ未熟者ですが、よろしければ見てやってください。

※これはぬらりひょんの世代から始まります。

第一幕　ぬらりひょん、拾いました

「……あれ？ここどこだ？」

俺がなぜここにいるのか、そしてここはどこなのか？

うーん、確か俺、さっきまで楽しいお食事タイムだったのに…

俺の名前は“氷羽”、現役バリバリの妖怪だ。

名前のとおり、氷を操る妖怪“雪男”である。

一応言っておくが、猿ではない。猿とか言った奴は殴る！！雪女の男版と思ってくれたらいい。

特徴は…うーん何だろう？特に無いんじゃないかな？

見た目はどこにでも居るような普通の人……でも立派な妖怪だぞ！！！！

「……なんだ？」

俺はさっきまで弁当、ムシヤムシヤと食べていた。

その時に…

思い出した！！

確かものすごい風に飛ばされてここまで来たんだ！！！！

「しかし、ここはどこなんだ？」

しばらく俺はまっすぐに道無き道を歩いていた。

すると、前に何かが倒れていた。

……人だ。

俺はあんまりめんどろなことに関わらないようにしているが、周りに人陰が無い以上、助けられないわけにはいかない。

「大丈夫ですか？」

俺が声をかけると、その男は・・・

「…なぜか急に体が動かんくなってしもうてのう、助けてくれんか？」

これが俺と奴の最初の出会いだった。

まあ仕方なくその男を起こし、背負った。

「俺は“雪男の氷羽”、お前は？」

俺が聞くと男は今にも死にそうな声で、

「…わしの名前は“ぬらりひょん”。・・・雪男？変わった妖じやのう、猿にでもなるのか？」

次の瞬間、俺はぬらりひょんを地面にたたきつけた

第一幕 ぬらりひょん、拾いました（後書き）

ちよつと自信ないです。

感想等、アドバイスなんかくれたらうれしいです。

・・・更新は遅いかも・・・

第二幕 財布にお金があると思っていたけど、なかった時のレジでの緊張は波ド

題名長くてすみません

第二幕です。

第二幕 財布にお金があると思っていたけど、なかった時のレジでの緊張は波ド

ドオオオン

俺はぬらりひょんを思いっきり叩きつけた。

「何するんじゃ…いてて。」

「お前が猿とか言うからだろ!!俺は猿とか言われるのが一番嫌いなんだよ。」

するとぬらりひょんは、すまなさそうに、

「わりいこと言ったな、すまんかった。」

と誤ったので許してやった。

そうそう、人間は素直が一番、……俺たち妖だけどね。

そんなこんなで歩いていると、そば屋を見つけたので入ることにした。

「そばなんて久しぶりな。ぬらりひょん、お前は？」

「……………」

「ん？どうした？」

俺が聞くと、奴は手をポンツ、と叩いて納得したように、

「おお！そうか、なぜか力が出ねえと思ったら、飯食うのを忘れていたんじゃない。」

……あきれた。こいつは馬鹿なのか？

しかし、うまそうに何杯も食べている姿をみて、俺も食べ始めた。

ズゾゾゾー

俺はすぐに一杯を食べきった。もう一杯食べたかったが、生活費が無くなるのでまんした。

「じゃあお勘定を。」

「はい、合計——でございます。」

あれ？そば一杯だけだかそんなしないはずじゃ…。

「え？おかしくない？そば一杯しか、「いいえ、お連れ様の分もですよ」、ええ！！」

「連れならそこに……居ねえ！！！」

「では、——いただきます。ありがとうございました」

俺の全財産が無くなる瞬間だった……。

第二幕 財布にお金があると思っていたけど、なかった時のレジでの緊張は波ド

お気に入りの方が二方も!!!!!!

ありがとうございます。

感想等、アドバイスがもらえるとうれしいです。

第三幕 組が出来ました(前書き)

だいぶ遅くなってすみません(――；)

これから毎話が短くなります。基本PSP投稿なので…。たまにP
C使って長く書けたらいいな)

第三幕 組が出来ました

それから長い年月が立ち

――奴良組が完成した

「奴良組もだいぶ大きくなりましたね、総大将」

「しかし、あの『ねじれ眼山』の牛鬼を仲間にできれば…」

総会でみんなが悩んでいる問題、それは『牛鬼』だ。

俺達（ぬらりひょんと俺の二人）はかつて牛鬼に挑んだことがあった。

そしてその結果、力が足らず返り討ちにあってしまった。

これはその時の話だ…。

「おい、ぬらりひょん、何をするつもりだ…？」

ぬらりひょんは、なぜか刀を持ったり食料をまとめていた。

「何ってその、アレじゃ！」

「いや、アレってなんだよ！！」

長い髪を後ろに延ばした二枚目の男が少し考えてから言った。

「アレじゃよ、百鬼夜行集めじゃ！」

「ああ、忘れてた、で？ 誰を仲間にしに行くんだ？」

普通のどこにでもいるような男が聞いた。

「『牛鬼』じゃよ」

「いいぜ、でもどんな妖だ？」

「牛の鬼じゃねーかの？」

こうして、俺達はねじれ眼山に向かった。

――行かなければよかったと、俺は後で後悔することになった。

第三幕 組が出来ました(後書き)

…うん、やっぱり短いですね w w

— すみません m () m

第四幕 クラスには大抵「二斉ので!!」詐欺がいる(前書き)

がんばっております(^^) V

第四幕 クラスには大抵「二斉ので!!」詐欺がいる

さて、ねじれ眼山に着いてしまった俺達。
眼の前には妖の大群……

「お、お、おいぬらりひょん。お前大將だよな？ よしっ！ ここは先陣を切って行け！」

氷羽がぬらりひよんを押しながら言った。

「い、いやいや氷羽君、大將は遅れて行くのが普通なんじゃ、さあさあ早く前へ！」

ぬらりひよんも氷羽を押す。

「いやいやいや、大將こそ！」

「いやいやいや、ほらさ、部下は大將守らねえといかんじやろ！」

睨み会う二人……

数十秒の沈黙の後……

「二斎のでっ！！で入ろう」

氷羽が提案した。

「いいぜ、やつぱみんな一緒じゃねえとな！」

向き合って笑う二人。

「二斉のでっ!!」

そして俺達はねじれ眼山に第一歩を踏みいれ……

「オiiiiiiii! / / / / / ぬらりひょん! なぜ入ってねえ!」

「あっちあっち」とぬらりひよんが指を刺した先は……

敵妖達で一杯だった!?

「貴様この山に無断で入るとは、いい度胸だな」

敵は一斉に俺に向かってきた。

「あの！違うんです！間違えてえええええ！！」
／／／／／

ごまかそうとしたが遅かった。

俺は後悔した：

第四幕 クラスには大抵「二斉ので!!」詐欺がいる（後書き）

前よりいい出来かな？

またがんばります

第五幕 氷羽の畏（前書き）

PSPって何で途中で書けなくなるのかな……？

更新がんばります

第五幕 氷羽の畏

「行けえええ！！」

牛鬼組の妖共が一斉に俺に襲いかかって来た。

しかし、

「ぐおわああ！！／／／／／」

妖共は次々と氷漬けにされていく。

「な、何だっ！？全員、攻撃中止しろ！」

敵の幹部らしき妖が叫んだ。

—— シュウウウウ

冷気の霧が、辺りを取り巻く…

霧の晴れた中には、美しく透き通った氷の羽の生えた男が立っていた。

氷羽だ。さっきまでとは違い、髪は水色で瞳は赤く、両手から青い妖気が出ている。

「どうした？来いよ…」

氷羽はそう言った瞬間、超スピードで敵の群に突っ込んだ！！
そして、

「『氷武一式・氷竜巻』！！／／／／／」

雑魚共は氷漬けになり、一掃された。

冷気が辺りを支配する。

「なかなかじゃのう、氷羽。もう終わったんじゃないか？」

「いや、まだみてーだぜ。」

そして真っ直ぐ見つめ、俺は言った。

「—— かろうじて避けたみたいだな…、貴様が牛鬼か？」

俺は指を差し、牛鬼を見つめた。

「……………いや、違う…。」

「…。」

——牛鬼じゃないみたいだ…

第五幕 氷羽の畏（後書き）

ねじれ目山の漢字出ねえ！

次もがんばります！

第六幕 発言して間違えたら恥ずかしい（前書き）

オリキャラ登場！！

がんばっているのですが…

第六幕 発言して間違えたら恥ずかしい

「な、な、何いいい!? / / /」

俺は驚いて一瞬言葉を無くしたが、叫び声を上げた。

「本当に違うんだな!？」

「違う!! 何度言ったら分かる!」

俺もぬらりひょんも「えっ? えっ?」となってしまった。
なぜなら――

奴の外見は整った顔立ちに鬼と牛を混ぜた様な角が生えていて、ついでに手から炎が出ていたからだ。

「「絶対牛鬼だよね!？」」

俺とぬらりひょんの声がハモる。

「だ・か・ら、違――う!!!!!!」

そう叫んでから、

「私の名は「炎火妃^{ひびき}」、牛鬼様の側近だ!!」

「火? そうか! それで奴は氷羽の氷が効かなかったわけじゃな?」

「そうらしいな…」

次の瞬間、巨大な畏が姿を表した。

「…牛鬼」

俺は牛鬼の畏の巨大さに畏れた。

しかし、ぬらりひょんはというと…

「ほう、お主が牛鬼か!」

そして次の言葉を口にする。

「牛鬼や…、お主わしの百鬼夜行に入らんかのお?」

まったく、こいつはこんな畏を見ても何とも思わないのかよ…

まあ、俺はアンタのそう言うところに引かれたんだがなww

「…。」

牛鬼は無言のままだ…

そして口が開いた。

「ぬらりひよんとやら、貴様はこのねじれ目山で暴れて、私にそんな事をほざくのか

第六幕 発言して間違えたら恥ずかしい（後書き）

おっと！ここで書けなくなりました。

ではまた次回です♪

第四幕 経験が実力を生む（前書き）

遅くなったかな？すみません…

そして、短くて駄文ですが、どうか宜しくおねがいします。

炎火鬼の名前を炎火妃にしました。読み方は同じです。

第四幕 経験が実力を生む

「ぬらりひょん、今すぐここから立ち去れ。そうすれば見逃してやるぞ」

牛鬼が警告？するが、ぬらりひょんは、

「わしは主が百鬼に入ってくれるまで帰らんつもりじゃぞ？」

「どうしてもと言うのなら、力づくで排除するぞ！ぬらりひょん！牛鬼を中心に畏が爆発した。」

「覚悟しろ！ぬらりひょん！」

牛鬼はぬらりひょんを切りつけようと、刀を振る。

しかし、刀が当たる瞬間、ぬらりひょんが消えた！！

「！？」

「これがわしの畏、『明鏡止水』じゃよ…、牛鬼、わしの勝ちじゃ」
ぬらりひょんは、牛鬼の後ろに現れ、切りつけた。

「牛鬼様ああ！！／＼／＼／」

炎火鬼が叫んだ。

寸での所で、刀で受けた。

「ぬらりひょん、認識できなくする妖…」

俺は独り言の用に呟いた。

ぬらりひょんはまた、消えた。

「消える、なかなかやっかいだ。しかし、まだ経験不足だ、ぬらりひょん」

ハアッ！！と叫ぶと、牛鬼は辺りを畏の刀で切りつけた。

ぬらりひょんの畏が断たれた。

「グハッ！？」

ぬらりひょんは体を真横に切りつけられた。

「おいっ！大丈夫かっ！！」

俺はぬらりひょんの前に駆け寄ろうとした、しかし…

「貴様の相手この私だ…」

俺の前に、炎火妃が立っていた。

第四幕 経験が実力を生む（後書き）

書けなくなっちゃいました…もう少し書きたかったのですが…

感想、質問、アドバイス、ダメだし、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9579v/>

ぬらりひよんの友～百鬼夜行と氷の羽～

2011年12月3日22時50分発行